

材料や構法などを工夫する

万が一床上まで浸水してしまった場合、家屋は相当の被害を免れませんが、建築時に家屋の材料や構法(つくり方)を工夫しておくことで、それをかなり軽減させることができます。

大きな考え方は3つほどあります。第1に、耐水性のあるものや、吸水しないもの、あるいは吸水しても乾燥すれば元通り使えるものなど、水に浸っても簡単にだめにならない材料を用いておくことが挙げられます。第2に、材料が吸水したり家屋の空隙に水が溜まってしまった場合に備えて、水の抜けやすい、乾燥のしやすい材料や構法を用いておくことです。そして第3は、材料が水を吸って取り替えを余儀なくさせられた場合、それを簡単に交換できるような措置を講じておくことです。

これらの考え方を組み合わせて住宅をつくっておくことで、浸水の直接の被害が軽減されるばかりでなく、復旧や補修も容易になって、生活まで含めた総合的な被害を抑えることができます。

●耐水性のある材料・構法の工夫

コンクリートや、十分に防錆措置のとられた鉄材、金属材料は、水に浸かってもほとんど問題ないと考えられます。ただし、状況によっては洗浄が必要です。一方、木造住宅の柱などは、構造的にはまず問題ありませんが、洗浄しても落ちない汚れが残ることがあります。

最近多く見られる窯業系のサイディングは、浸水による被害はほとんどありません。下見板などでも、若干跡が残ることもありますが、性能的に特に問題ありません。概してもともと雨がかりを考慮している外壁材料は、水に対して強い材料です。むしろ壁の中に入り込んだ水をいかに早く抜いてしまうかのほうが肝心です。

その反面、内装用の材料は、そもそも耐水性が考慮されていないものがほとんどです。床材にせよ壁材にせよ、汚れや臭気が問題となりますので、取り替えが前提となります。特に畳は、いったん水に浸かると全く使い物になりません。床材では、ビニール製のシートなどが比較的強い材料です。

ムクの木材の場合は、若干の汚れや狂いを気にしなければ、再使用も可能です。しかしこれも、樹種によってかなり差があります。一般に、ヒノキ、ヒバなど、無処理のまま土台にも使える樹種は、水湿に強いと言えます。

下地に用いるボード類も、種類による耐水性の差が相当あります。合板も、耐水合板であれば水には相当強いのですが、一般の合板では面外に反ってきたり、ものによってはプライ(層)が剥がれてくることもあります。家具や建具に用いる薄いベニアは全く使い物にならなくなります。MDF(中質繊維板)などの繊維板も、水を吸って大きく膨らんでしまいます。最近頻繁に用いられるせっこうボード製品も、再利用は不可能ではありませんが、乾燥が難しいため困難です。

壁や床の断熱材では、ロックウールやグラスウールは吸水すると用をなさなくなるばかりでなく、水湿を保持して建物に悪影響を与えかねないため、早急な取り替えが必要です。発泡ポリスチレンや発泡ポリウレタンであれば吸水性が低いため、再利用が容易です。なお最近では、水を吸いにくいように改良された繊維系断熱材も開発されています。



窯業系
サイディング



ビニール製の
シート



構造用合板
特類(耐水)



せっこうボード